



看護研究の研究デザイン

増田 徹

I. はじめに

図書館員として、看護研究にどう関わるか。もちろん司書の守備範囲にとどまるのが正しいあり方だと考えますが、文献検索をとってみても専門的な検索になればなるほど検索結果の吟味にその分野の知識が必要となります。対象となる学問分野にまったく無関係でいられるわけはなく、さりとしてそこへ足を踏み入れるのは相当な覚悟のいることであり、立ち尽くしている人も多いかもしれません。今回看護研究の研究デザインについて再整理してみました。看護研究そのものについてはおよびがつかなくとも、研究デザインといった形式的なことは、専門領域に踏み込んでいない図書館員でも押さえておけると考え、またそういった知識が図書館員としての日々の業務に役立つに違いないと考えたからです。

II. 研究デザインの分類

研究デザインという言い方をしましたが、資料によって、研究方法とか研究の種類とか言い方はいろいろあります。よく見られる看護研究の分類は、ヴァリエントもありますが、表1に示したものが一般的です¹⁾。これはとてもなじみのある分類方法であり、看護研究の解説でもとてもよく見かけます。

研究デザインといっても、要は看護研究を何らかの視点で分類するということで、複数のわけ方が当然存在します。黒田²⁾は、「看護研究における研究デザインのタイプについては、現在

のところさまざまな紹介がされている」として、D. Diers、野嶋、N. Burnsの3つの分類をあげています。野嶋³⁾も「看護研究で用いている研究デザインをどのように分類するかは、さまざまな意見が見られ、一致した見解には達していない」とし、「一般に、実験的操作を加えるかどうかで、実験研究デザイン、準実験研究デザイン、非実験研究デザインに分類される。一方、看護界では、歴史的研究、調査研究、実験研究という分類が用いられてきた」としています。野嶋の分類はD. Diersに基づいているので、D. Diers⁴⁾(表2)とN. Burns⁵⁾(表3)の研究デザインの分類を挙げてみます。

D. DiersとN. Burnsの分類方法も、看護研究を解説するたくさんの文献を見ていると確かによく目にします。ただしDiersのものは、「問いの種類」に従って分類していますが、それぞれに簡潔なネーミングがないことから、それほど

表1 研究の種類

方法	内容
事例研究	1つまたは少数の事例について詳しく調べ、それによって問題点などを究明し、一般的な法則や理論を発見しようとする方法
実験研究	理論や仮説が正しいかどうかを、人為的に一定の条件を設定し、確認する方法。調査対象をいくつかのグループに分け、グループごとに介入を統制し、その反応の差を分析する
調査研究	ある事項を明確にするために客観的指標を用いて集団を調べ、その結果を基に分析する方法。調査方法の種類には観察法、質問紙法、面接法などがある
文献研究	文献を基に、テーマについて整理・分析し、新しい理論や知見などを得ようとする方法

ますだ てつ：藍野大学 中央図書館

表2 D. Diers

探求のレベル	問いの種類	研究計画	答えの種類 (理論)	研究計画に対する他の名称
1	これは何であるか?	因子(を)探求(する)	因子(を)探求(する) (命名する)	探索的 成文化的 記述的 状況整理的
2	何が起っているのか?	関係(を)探求(する)	因子(を)関係(づける) 状況(を)記述(する)	状況(を)描写(する) 探索的 記述的
3	もし……すれば、何が起るのだろうか?	関連(を)検証(する) 因果仮説(を)検証(する)	状況(を)関係(づける) (予測的)	相関的 調査計画 非実験的 経験実験 実験的 説明的 予測的
4	……を起こすには、私はどうするか?	規定(を)検証(する)	状況(を)産生(する) (規定)	

表3 N. Burns

看護研究の分類システム
量的研究のタイプ
記述的研究 相関関係的研究 準実験研究 実験研究
質的研究のタイプ
現象学的研究 グラウンデッドセオリー研究 記述民俗学的研究 歴史研究 哲学的追求： ・基礎的探求 ・哲学的探求 ・倫理的分析 批判的社會理論の研究法
成果研究
介入研究

一般的になっていないかもしれません。

日本の看護論文を研究デザインから分類したものに、聖路加看護大学大学院の学位論文を分類した有森ら⁶⁾の研究と、大阪府立看護大学大学院の学位論文を分類した、高山ら⁷⁾の研究があります。後者も前者の分類にならっており、それは下記の通りです。

- ①専攻領域
- ②提出年 (論文が提出された年)
- ③研究論文の分類

- ④研究対象 (ケアの受け手、ケア提供者、ケアの受け手と提供者の両者、その他に分類)
- ⑤最終分析対象者数
- ⑥研究デザイン (記述研究、相関研究、準実験研究、実験研究に分類)
- ⑦研究分析方法 (質的分析、量的分析、両方用いた研究に分類)
- ⑧データ収集法 (面接方法、観察方法、質問紙法、入手可能な(既存の)データ、生理学的測定法、その他に分類)

⑥に研究デザインがありますが、Burnsの分類方法の「量的研究のタイプ」に従っています。では、記述研究、相関研究、準実験研究、実験研究とはそれぞれ何でしょうか? Burnsには邦訳があり、そこに解説されていますが、かなり難しく、それぞれを具体的に把握するのは困難です。しかしこれをわかりやすく解説している文献⁷⁾があり、それぞれの具体例もつけてくれていますので、それを表にまとめてみました(表4)。

Ⅲ. 「質的研究」とは

しかし今回一番注目したいのが、Burnsの分類にある「量的研究」と「質的研究」です。現在の看護研究において、よく耳にする言葉であ

表4 Burns の分類方法

研究デザイン	解説	研究例
記述的な研究	研究対象の現象について何も情報がないような場合に、それが何であるかをそのままの状態で記述しようとする方法で、研究のグレードとしては初期段階の研究と言える	「在宅で高齢者を介護する介護者の負担感の実態」を見ようとする研究。介護者による「負担感」の報告を記述。 ある程度関連する既存の尺度を用いてデータの一応の妥当性を押さえることになる
相関関係的な研究	変数間の関係を調べようとする研究なので、2つ以上の変数が存在しなければならない。	介護者の「負担感」に「肉体的な疲労」と「精神的な疲労」があるとして、この2つが相互に関係し合っているか（肉体的な疲労による負担感の強い人ほど精神的な疲労による負担感がつよくなるか? など）を見ようとする研究。
準実験的な研究と実験的な研究	変数間の因果関係を検証するための研究なので、2つ以上の変数が存在し、因果関係にあることが分かっている場合に用いられる。準実験と実験の違いは、準実験の場合は対象の無作為化もしくは対照群の設定のいずれか（あるいは両方）が欠けている。可能であればきちんとした実験に見合う設定が望まれるが、臨床看護研究ではほとんどの場合不可能であり、倫理上の問題さえ生じかねない。適切な準実験の利用が期待される。	「介護者の負担感に対するソーシャル・サポートの効果」を検討する研究。 A群（実験群）の介護者にはソーシャル・サポートが得られるようなケア（介入）を行い、B群（対照群）の介護者にはケア（介入）を行わずに両者の負担感を測定し比較する。

り、研究デザインの分類としては非常にポピュラーなものではないでしょうか。「量的研究」「質的研究」とは一体何でしょう？その違いを一言で言うと、質的研究は収集するデータが「文字」で、量的研究は収集するデータが「数字」なのです。量的研究の、収集するデータが数字であるというのは、研究というのは統計学を使って検証するのでイメージしやすいですが、収集するデータが文字であるというのはどういうことでしょうか。

看護の領域で扱う事象のなかには、“患者の主観的な訴え”のように言葉や動作で表現される数量化できない事象が多数含まれています。たとえば、患者が受けている看護に対してどの程度満足しているかは、看護婦なら誰でも知りたいところでしょう。ところが、「満足感」のように主観的な体験を特定の尺度を用いて無理に数量化すると、「満足度4点」などという一見もっともらしいデータが得られ、それで満足してしまい本質を見失ってしまう人もいます。しかし、「満足感」というのはあくまでも主観的な体

験ですから、「満足度4点（かなり満足している）」といっても人によってとらえ方・感じ方が異なるため、本来は数量化するには適さないと言えます。もちろん、そこで得られた得点から平均値を出したりしては絶対にいけません。このような事象を研究する場合に、質的な研究方法が必要となるのです⁸⁾

質的研究とは具体的には以下のようなものがあります⁹⁾。

- ① バイオグラフィー
研究者に語られた言葉や、文書やアーカイブとして残されたデータから個人の経験を研究するもの
- ② エスノグラフィー
文化、社会集団やそのシステムについて描写し、解釈するもの
- ③ 現象学的方法
数名の対象者の人生経験や意味について概念や現象を描写するもの
- ④ グラウンデッド・セオリー
厳格な研究方法によって得られたデータか

ら理論をシステマティックに生成するもの。

⑤事例研究

一例または数例の事象について詳細に調べ、分析、研究すること

⑥KJ法

川喜田二郎氏によって創案された創造力を培い、創造を励ます方法

質的研究は研究対象をじっくりと分析しますが、その際にきちっとした方法論に従うことが重要です。というのも、質的研究はそもそも科学なのかどうかということさえ問題にされているからです。

現象を記述する質的研究が、看護実践者に与えた影響は大きなものであるが、それを手放しでは喜べないのには理由がある。筆者には、現在の質的な研究が果たして“科学”なのかという疑問が残っているからである¹⁰⁾。

質的研究の授業の際、「質的研究について思うこと」を尋ねると、必ずといってよいほど次のような発言がある。「質的研究は、研究者の能力に左右されるし、科学的といえるのかどうか疑問に思っている」。質的研究では、研究者自身が測定用具（研究のためのツール）となるので、「研究者の能力に左右される」というのは事実である。しかし、研究者自身が測定用具となると、「科学的ではない」のだろうか？¹¹⁾

質的研究の結果に対しては、それが主観によるテキスト解釈に基づくという理由から、非科学的であるとする量的研究者が多数存在するといつてよいだろう¹²⁾。

IV. 質的研究の背景

質的研究を理解するために、背景を紹介しします。

わが国の質的研究方法のひとつが実践した看護ケアを記述する事例研究であったが、米国における質的な看護研究方法の発展をたどってみると、そこには研究方法を生み

出した社会的な背景がある。米国においても1960年代までは、看護系の博士課程はほとんどなく、その時代の看護研究者の多くは、「文化人類学」「教育学」「心理学」「社会学」で博士号を修得している。その研究者たちは、1970年代から発展していった看護学の大学院教育の中で、自分の学んだ学問に基づく研究方法、すなわち、「Ethnography」「Phenomenological Approach」「Grounded Theory」などを教えていったのである。その結果が今日の看護学における質的研究方法であり、また、米国に留学した日本の看護研究者・教育者も同じように、自分が学んだ方法を持ち帰って看護系大学の中で教育をしているのである⁹⁾。

看護における今日的な質的研究というのはそれほど歴史が古くなく、またその手法は他の学問から取り入れたものなのです。

V. 質的研究と科学

質的研究と科学についての議論は、文献を見てもなかなか難解であり、ここで簡単に提示するのは私の能力に余ります。そこで、図1を見て下さい。質的・量的に付随するものとして帰納的、演繹的という概念があります。

研究方法上において妥当なデータ収集を行い、最終的には「仮説 (hypothesis)」を見出します。これが帰納的推論 (inductive reasoning) にもとづく研究です。この方法は、それまでの科学では捉えきれなかった研究対象の個別の側面を、観察を通してじっくりと見つめることから、質的研究 (qualitative research) とも言われます。このような帰納的・質的手続きによって見出

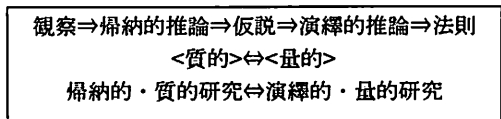


図1 質的研究と科学について

された「仮説」は、特殊な観察（仮説を検証するために、ある画だけを意図的に観察する）によって、その確からしさについて検証されます。これが演繹的推論（deductive reasoning）にもとづく研究です。この方法は、仮説を検証するために、複数のデータを集めて統計的に仮説を検証することから量的研究（quantitative research）とも言われます。科学的な研究とは、この2つの推論にもとづいて実施されます¹³⁾。

帰納法というのは、赤い実 a は甘い、赤い実 b は甘い……という経験を得て、この赤い実 z も甘い、あるいは、赤い実はどれも甘いと結論する推論です。すなわち個別的・特殊な事例から一般的・普遍的な規則を見出そうとする推論方法のことで、前提が真であっても結論が真とは限らず、飛躍があり、本来的に不確かな推論といえるのです。

しかし、その現象に関する理論が存在しない、或いは確実でない場合、演繹は成立しない。そのような場合でも帰納は成立するので、帰納は新しい分野を開発し、新しい理論を模索する場では先ず仮説を立てるための方法として極めて重要である。自然科学では観察や実験が重視され、そこからさまざまな仮説が作られ、それがその分野の進歩の基礎となるが、そこから得られる判断は常に帰納的である¹⁴⁾。

質的研究はそれ自体不確かなものを含んでいますが、科学的進歩の過程においてその必要性は疑い得ないと思われれます。「質的研究」と「量的研究」は、それぞれに固有の特性を備えていて、両方をうまく使い分けていく必要があります。

参考文献

- 1) 藤田和夫. これならできる看護研究. 東京: 照林社: 2007. p. 14.
- 2) 黒田裕子. 黒田裕子の看護研究 step by step. 第2版. 東京: 学研: 2001. p. 44-5.
- 3) 野嶋佐由美. 研究デザイン. 井上幸子ほか編. 看護における研究 (看護学大系 10). 第2版. 東京: 日本看護協会出版会: 1999. p. 64.
- 4) Diers D. 看護研究: ケアの場で行うための方法論. 東京: 日本看護協会出版会: 1984. p. 91.
- 5) Burns N, Grove SK. バーンズ&グローブ看護研究入門: 実施・評価・活用. 東京: エルゼビア・ジャパン: 2007. p. 27.
- 6) 有森直子ほか: 聖路加看護大学大学院における学位論文の特性—開設 20 年を振り返って—. 聖路加看護大学紀要. 2003;29:59-72.
- 7) 高山暁美ほか: 大阪府立看護大学大学院看護学研究科博士前期課程における学位論文の研究方法に関する一考察. 大阪府立大学看護学部紀要. 2008; 14(1):57-61.
- 8) 小林礼以子, 小林重雄: 研究デザインの検討. 看護技術. 1998; 44(7):87-91.
- 9) 志村健一: 質的研究の進め方, データの収集・分析の手法. ナースセミナー. 2007; 28(1):4-10.
- 10) 中山洋子: 新しい看護研究方法の開発. 保健の科学. 2005; 47(5):324-8.
- 11) グレグ美鈴. 質的研究とは. グレグ美鈴ほか編著. よくわかる質的研究の進め方・まとめ方. 東京: 医歯薬出版: 2007. p. 11.
- 12) 高木廣文: テキストの主観的解釈は科学的か. 看護研究. 2009; 42(3): 221-8.
- 13) 川口孝泰: 量的研究の進め方 — 質的研究との比較を通して. 看護教育. 2007; 48(3): 198-202.
- 14) 帰納. フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)». [引用日 2009-08-08].
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B8%B0%E7%B4%8D